

趙景達先生を送る

山 田 賢

趙景達先生とはじめてじっくりとお話したのは、私が千葉大学文学部に着任したばかりの1993年の春、ドイツ史の下村由一先生が文学部長をお辞めになるときの慰労会の席であった。その時の慰労会は、金子亭先生の発案により、ドイツ料理店で「非妥協的ドイツ料理」（慰労会を主唱された金子先生の檄文にはこのように書かれていたはずである）を囲んで行われた。それほど広くはない店内で、趙先生と私は先輩方に中央のテーブル席を譲り、壁際で向かい合ってとりとめもない話をした。私たちの話題は朝鮮の「東学」と中国の白蓮教から始まり、そこからドイツ農民戦争、そして安丸良夫の民衆思想やウェーバーの儒教と道教などに及び、（私の手前勝手な記憶では）大いに意気投合した。

当時の会合に顔を揃えていた先生方は、今はほとんど退職されており、もはや霽のかかったような遠い過去の昔語りなのだが、このささやかな、しかし私にとっては鮮明な思い出からこの小文を語り出すのは、それが趙先生の学問に対する姿勢を象徴するものでもあるように感じられるからである。

趙先生の朝鮮近代史研究にはいくつかの重心がある。その第一は朝鮮近代の民衆運動とそれを支えた民衆思想の研究である。とりわけその中核を成したのは「東学」の研究であるが、趙先生の東学研究は、その教義の成立と変容、反乱の構成員と組織、反乱の推移と政府・諸外国の反応などあらゆる側面から、「異端」と見なされてきた「東学」を立体的に復元した重厚な力作であった。第二は、近代知識人とナショナリズムの研究である。近代朝鮮における「開化派」知識人たちは、単純に西欧的国民国家を範としつつ、伝統社会から軽やかに身を翻し去ったわけではない。彼らは伝統的な政治文化の基体―「儒教的民本主義」―の内側から、それぞれの苦闘を経つつ近代国家の秩序を構想したのであり、趙先生の研究は彼ら開化派知識人の内面的苦闘

に寄り添いつつ、朝鮮近代の思想的営為を伝統社会との連続性—それは単純な継承ではなく苦渋と屈折を伴うものであるのかもしれないが—を描出した点に特長がある。第三は、東アジア比較史の観点である。言うまでもなく趙先生の研究は朝鮮近代史を主たる対象として進められてきたのだが、そのみを単独で位置づけるのではなく、つねに東アジアの他地域—日本列島、中国大陆から東南アジアまで—を比較の対象として視野に収めてきたことはもちろん、世界史的動向の中で朝鮮の歴史を位置づけようと意志してきたことを忘れることはできない。

以上のように趙先生の実証的な関心は多方面に向けられていたが、それらの一見多方面に向かっていたように見える研究を統合している中核は、朝鮮の伝統社会において形成され、社会全体を浸潤しつつ政治文化の基体となっていた「儒教的民本主義」への関心である。たとえば「東学」は西欧化モデルによる近代国家を範型とする眼差しから見れば排除すべき迷妄に他ならないが、官僚統治なき「一君万民」の儒教的ユートピアへと回帰しようとする「東学」の運動は、伝統的な政治文化の観点から見れば儒教的世界像の民衆の再構築であり、民衆が伝統的な政治文化とその世界像を〈生き直す〉ための営為であったと言えるだろう。

そしてこれは当然「東学」のみの問題ではない。「開化」を目的とした朝鮮の近代知識人にとっても、儒教的普遍主義＝「天理」を否定して、換言すれば儒教的世界像から完全に離脱して、「私」の領域に過ぎないナショナリズムを肯定することは大きな困難を伴っていた。だとすれば、「開化」を自らの責務と思い見なしつつも、やがてそこから身を引きはがし、アナキズムという国家を超越する普遍へと到りついた思想家の営為こそが、むしろ「異端」ではなく伝統的政治文化の正統的な継承であったのかもしれないのである。

比較史の観点においても重要な鍵となっているのは儒教という参照軸である。たとえば日本列島の「近代」が速やかにナショナリズムと強国を志向する「霸道」へと向かったのは、列島においてはそもそも儒教的世界像が内面化されていなかったからではないのか、というのが趙先生の提起した重要な論点の一つであったと思う。すなわち、日本はいったん「儒教化」したに

もかわらず、これを内側から超克したのではなく、もともと儒教的世界像を内面化することがなかったために、容易にそれを捨て去って「近代化」することができたということになる。

このように、エリートとしての知識人も民衆運動をも通貫する文化的共同性としての基体から発想する趙先生の歴史学から、私は、たとえば「中国」という世界を「生活感情の総和」という観点から、立ち現れる現象をすべて包摂する「生々して息まない人間を超えたある種の茫漠たる実体」として捉えようとした竹内好の中国観を想起する。いささかの飛躍を承知の上で述べるならば、趙先生が歴史学という営みを通して把握しようとしたのは、「生々して息まない人間を超えたある種の茫漠たる実体」としての「朝鮮」という基体なのではなかったか。そして、その伝統的な基体を引き受けながら外来の「近代」と向かい合った人々―知識人から民衆まで―の「掙扎」を描くことではなかったか。

そのように思い至れば、遠い過去に交わした会話のテーマが、ドイツ農民戦争から安丸良夫、ウェーバーであったことは示唆的である。これらを話題に上した趙先生の脳裏には、民衆運動をどう捉えるのか、持続する民衆思想の基層をどう捉えるのか、それらを比較史的な観点からどのように位置づけるのか、という思考が既にかたちを成しつつあったのではないかと、今になって思い至るのであり、かつまたそれを目の当たりにすることができた自身の幸運にも思い至るのである。

ある文化的共同性の「茫漠たる実体」を自らの課題として引き受け、その内的構造を明らかにするためには、たぶん性急な論断ではなく、持続する意志が求められるであろう。その意味で、ある文化的共同性の論理を総体として把握することを目指した趙先生の研究は、現在の状況の中ますます重要な意義を持っているように思う。先生の今後のご研究の発展を祈念しつつ搁筆する。

趙景達先生 略歴

経歴

- 1954年 7 月 東京都台東区千束町に父趙炳生、母金順娘の次男として誕生
- 1973年 4 月 中央大学文学部入学
- 1977年 3 月 中央大学文学部卒業
- 1977年 4 月 中央大学大学院文学研究科修士課程入学
- 1980年 3 月 中央大学大学院文学研究科修士課程修了
- 1980年 4 月 東京都立大学人文学部研究生（～1981年 3 月）
- 1981年 4 月 東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程入学
- 1986年 3 月 東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
- 1986年 4 月 東京都立大学人文学部助手（～1989年 3 月）
- 1989年 4 月 千葉大学文学部助教授（～1999年12月）
- 1996年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授併任（～1997年 3 月）
- 2000年 1 月 千葉大学文学部教授
- 2003年 5 月 朝日新聞社AAN客員研究員（～2004年 3 月）
- 2006年 4 月 千葉大学大学院人文社会科学研究科教授に配置換え
- 2006年 5 月 国立歴史民俗博物館客員教授（～2010年 3 月）
- 2008年 4 月 千葉大学文学部教授に再配置換え
- 2014年 4 月 千葉大学大学院人文社会科学研究科教授に再配置換え
- 2017年 4 月 千葉大学大学院人文科学研究院教授に配置換え

非常勤講師・招聘講義歴

- 1988年 4 月 都留文科大学文学部（～1991年 3 月）
- 1990年 4 月 津田塾大学学芸学部（～1990年 9 月）
- 1990年 4 月 立教大学一般教育部（～1999年 3 月）
- 1992年 4 月 信州大学人文学部（～ 9 月）
- 1993年 4 月 東京大学教養学部（～1996年 3 月）
- 1994年 4 月 茨城大学人文学部（～ 9 月）

趙景達先生を送る

- 1995年 4 月 神田外語大学外国語学部（～2000年 3 月）
1996年 4 月 茨城大学人文学部（～ 9 月）
1996年10月 お茶の水女子大学文理学部（～1997年 3 月）
1998年 4 月 東京都立大学人文学部（～1999年 3 月）
4 月 大阪大学文学部（～ 9 月）
4 月 茨城大学人文学部（～10月）
1999年 4 月 北海道大学文学部（～ 9 月）
2000年 4 月 茨城大学人文学部（～ 9 月）
2001年 4 月 明治大学大学院文学研究科（～現在）
2002年 4 月 早稲田大学社会科学部（～2009年 3 月）
12月 茨城大学人文学部（～2002年 3 月）
2003年 4 月 東京大学教養学部（～2003年 9 月）
4 月 早稲田大学大学院社会科学研究科（～2009年 3 月）
4 月 埼玉大学大学院文化科学研究科（～2006年 3 月）
2004年 9 月 韓国成均館大学校東アジア学術院（2004年 9 月 1 ～ 3 日招
聘集中講義）
10月 茨城大学人文学部（～2005年 3 月）
2005年10月 東京大学教養学部（～2006年 3 月）
2005年 9 月 韓国円光大学校（2006年 9 月14日招聘講義）
2006年10月 茨城大学人文学部（～2007年 3 月）
2008年 6 月 韓国高麗大学校（2008年 6 月13日招聘講義）
2012年 4 月 明治大学情報コミュニケーション学部（～現在）
2013年 4 月 東洋大学大学院文学研究科（～2019年 3 月）

趙景達先生 研究業績目録

01 著書

(単著)

- 1) 『異端の民衆反乱—東学と甲午農民戦争』(岩波書店、1998年12月、総442頁)、のち韓国で『이단의 민중반란—동학과 갑오농민전쟁 그리고 조선 민중의 내셔널리즘』(역사비평사、서울、2008年11月)として翻訳出版される。
- 2) 『朝鮮民衆運動の展開—士の論理と救済思想』(岩波書店、2002年5月、総376頁)、のち韓国で『민중과 유토피아—한국근대민중운동사』(역사비평사、서울、2009年3月)として翻訳出版される。
- 3) 『植民地期朝鮮の知識人と民衆—植民地近代性論批判』(有志舎、2008年12月、総313頁)、のち韓国で『식민지기 조선의 지식인과 민중—식민지 근대성론 비판』(도서출판선인、서울、2012年4月)として翻訳出版される。
- 4) 『近代朝鮮と日本』(岩波書店、2012年11月、総288頁)、のち韓国で『근대조선과 일본 — 조선의 개항부터 대한 제국의 멸망까지』(열린책들、서울、2015年8月)、中国で『近代朝鮮与日本』(新星出版社、2019年9月)として翻訳出版される。
- 5) 『植民地朝鮮と日本』(岩波書店、2013年12月、総272頁)、のち韓国で『식민지 조선과일본』(한양대학교출판부、서울、2015年8月)として翻訳出版される。
- 6) 『朝鮮の近代思想—日本との比較』(有志舎、2019年3月、総460頁)
- 7) 『近代朝鮮の政治文化と民衆運動—日本との比較』(有志舎、2020年3月、総423頁)

(共著)

- 1) 『近現代史のなかの日本と朝鮮』(山田昭次・高崎宗司・鄭章淵との共著、東京書籍、1991年6月、担当部分「6 甲午農民戦争と日清戦争」「7 日清・日露戦間期の朝鮮」「8 近代日本の朝鮮観」「9 日露戦争と朝鮮」「10 朝鮮の保護国化」「11 国権回復運動」「12 韓国併合と武

- 断政治」pp. 51～121)、のち韓国で『근현대사속의 한국과 일본』(図書出版돌베개、서울、1992年5月)として翻訳出版される。
- 2) 『歴史と真実』(若桑みどり・三宅明正ら9名との共著、筑摩書房、1997年11月、担当論文「近代日本における道義と国家」pp. 91～120)
- 3) 『東アジア近現代通史—19世紀から現在まで(上・下)』(和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・中野聡・川島真との共著、岩波書店、2014年9月、『岩波講座 東アジア近現代通史』〈全11巻〉の通史編と座談会を抜粋して冊子化したもの、総266頁+270頁)、のち韓国で『동아시아 근현대통사』책과함께、서울、2017年12月)として翻訳出版される。

02 編著

(単編著)

- 1) 『植民地朝鮮—その現実と解放への道』(東京堂出版、2011年9月、担当論文「総論 植民地朝鮮」pp. 1～18、「戦争と朝鮮人」pp. 233～261)
- 2) 『近代日朝関係史』(有志舎、2012年9月、担当論文「近世の朝鮮社会と日本」pp. 1～28)
- 3) 『儒教的政治思想・文化と東アジアの近代』(有志舎、2018年3月、担当論文「東アジアの儒教化と近代」pp. 1～26、担当論文「東アジアの儒教化と代」pp. 1～26、「近代朝鮮における民国思想」pp. 53～80) 近代」pp. 1～26、「近代朝鮮における民国思想」pp. 53～80)

(共編著)

- 1) 『20世紀を生きた朝鮮人』(林哲・徐京植との共編著、大和書房、1998年10月、担当論文「道義は実現されうるか—韓末啓蒙運動家李沂の思想と行動」pp. 37～60)
- 2) 『暴力の地平を超えて』(須田努・中島久人との共編著、青木書店、2004年5月、担当論文「序論 いまなぜ暴力か」pp. 9～13、「暴力と公論—植民地朝鮮における民衆の暴力」pp. 275～313)
- 3) 『戦争の時代と社会—日露戦争と現代』(安田浩との共編著、青木書店、2005年9月、担当論文「日露戦争と朝鮮」pp. 94～122)

- 4) 『アジアの国民国家構想』(久留島浩との共編著、青木書店、2008年3月、担当論文「総論 アジアの国民国家構想」pp. 1～42)
- 5) 『国民国家の比較史』(久留島浩との共編著、有志舎、2010年3月、担当論文「はじめに 国民国家を比較することの意義」pp. i～vi、「朝鮮の国民国家構想と民本主義の伝統」pp. 88～111)
- 6) 『近代日本のなかの「韓国併合」』(安田常雄との共編著、東京堂出版、2010年3月、担当論文「問題提起 近代日本のなかの「韓国併合」」pp. 13～37)
- 7) 『「韓国併合」100年を問う〈『思想』特集・関係資料〉』(宮嶋博史・李成市・和田春樹との共編著、岩波書店、2011年3月、担当論文「武断政治と朝鮮民衆」〈『思想』1029、2010年1月、の再所収〉、担当解説「史料解説 十五年戦争下の朝鮮—満州事変から解放まで」pp. 353～354)、のち韓国で『일본, 한국병합을 말하다』(열린책들, 서울、2011年8月)として翻訳出版される。
- 8) 『比較史的にみた近世日本—「東アジア化」をめぐる』(須田努との共編著、東京堂出版、2011年5月、担当論文「朝鮮の民本主義と民衆運動—近世日本との比較」pp. 284～310)、のち本稿は韓国で「조선의 민본주의와 민중운동—근세 일본과의 비교」として배항섭・손병규『임술민란과 19세기 동아시아 민중운동』(成均館大学出版部, 서울、2013年4月、pp. 363～395)に翻訳収録される。
- 9) 『薩摩・朝鮮人陶工村の四百年』(久留島浩・須田努との共編著、岩波書店、2014年7月、担当論文「苗代川の近代史」pp. 59～93)

03 編集

- 1) 『丸善エンサイクロペディア 大百科』(編集協力、丸善、1995年2月、担当コラム「朝鮮：朝貢体制から万国公法体制へ」ほか20小項目)
- 2) 『朝鮮人物事典』(木村誠・馬淵貞利・吉田光男との共編集、大和書房、1995年5月、担当部分「東学と甲午農民戦争」「義士の群像」)
- 3) 『資料 新聞社説に見る朝鮮 征韓論～日清戦争』(全6巻、北原スマ子・園部裕之・長谷川直子・吉野誠との共編集、緑陰書房、1995年

9月)

- 4) 『新しい歴史教科書』の〈正しい〉読み方—国の神話を超えて』(ひらかれた歴史教科書の会編、青木書店、2007年3月、近代編責任編集、担当論説「近代日本とアジア」「日清戦争と朝鮮」「一等国」になった日本」)
- 5) 『岩波講座 東アジア近現代通史』(和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・中野聡・川島真との共編集、全11巻、2010年10月～2011年9月、担当論文などは別掲)
- 6) 『講座 東アジアの知識人』(原田敬一・村田雄二郎・安田常雄との共編集、全5巻、有志舎、2013年9月～2014年4月、担当論文などは別掲)

04 学術論文

- 1) 「東学農民運動と甲午農民戦争の歴史的 성격」(『朝鮮史研究会論文集』19、1982年3月、pp. 117～150)、のち韓国にて『甲申甲午改革期の近代変革과 民族運動』(칭아出版社、서울、1983年)と『韓国近代政治史研究』(삼계절、서울、1985年)に翻訳掲載される。
- 2) 「甲午農民戦争指導者=全琫準の研究」(『朝鮮史叢』7、1983年6月、pp. 41～84)
- 3) 「朝鮮における大国主義と小国主義の相克—初期開化派の思想」(『朝鮮史研究会論文集』22、1985年3月、pp. 61～91)
- 4) 「金允植における民衆観の相克」(『アジア史研究』11、中央大学、1987年3月、pp. 28～47)
- 5) 「安重根—その思想と行動」(『歴史評論』469、1989年5月、pp. 22～31)
- 6) 「朝鮮近代のナショナリズムと東アジア—初期開化派の「万国公法」観を中心に」(『中国—社会と文化』4、1989年6月、pp. 55～72)
- 7) 「朝鮮における日本帝国主義批判の論理の形成—愛国啓蒙運動期における文明観の相克」(『史潮』新25、1989年6月、pp. 59～82)
- 8) 「朝鮮近代のナショナリズムと文明」(『思想』808、1991年10月、pp.

114～138)

- 9) 「朝鮮人の労働観—大韓帝国期を中心に」(『ほるもん文化』 2、1991年10月、pp. 124～142)
- 10) 「1894年農民戰爭에 있어서 東學指導者の 役割—徐丙鶴・徐仁周를 中心으로」(『歴史研究』 2、서울、1993年11月、pp. 69～82)
- 11) 「東学における正統と異端」(平石直昭編『アジアから考える』 5、東京大学出版会、1994年 6 月、pp. 55～97)
- 12) 「朝鮮の独立と日清戦争」(『季刊中国』 39、1994年12月、pp. 17～28)
- 13) 「李朝末期の民乱—原州民乱 (1885年) の事例から」(『朝鮮史研究会 論文集』 33、1995年10月、pp. 93～118)
- 14) 「大韓帝国期の民衆運動」(『歴史学研究』 677、増刊号、1995年10月、pp. 94～101)
- 15) 「朝鮮における実学から開化への思想的転回—朴珪寿を中心に」(『歴史学研究』 678、1995年11月、pp. 12～22)
- 16) 「金玉均から申采浩へ—朝鮮における国家主義の形成と転回」(歴史学研究会編『講座 世界史』 7、東京大学出版会、1996年 1 月、pp. 333～360)
- 17) 「朝鮮の義賊—活貧党の世界を中心に」(『東洋文化研究』 1、学習院大学、1999年 3 月、pp. 199～234)
- 18) 「朝鮮の終末思想 = 『鄭鑑録』 と東学—植民地期を中心に」(『歴史学研究』 724、1999年 6 月、pp. 42～53、76)、のち加筆修正して「朝鮮の終末思想 = 『鄭鑑録』 と植民地期の東学」と題して、歴史学研究会編『再生する終末思想』(青木書店、2000年11月、pp. 195～230)に再掲載。
- 19) 「開国前夜における朝鮮の民乱—壬戌民乱の歴史的 성격」(深谷克己編『民衆運動史—近世から近代』 5、青木書店、2000年 8 月、pp. 85～110)
- 20) 「植民地朝鮮における新興宗教の展開と民衆—普天教の抗日と親日(上・下)」(『思想』 921・922、2001年 2・3 月、pp. 64～87、pp. 136～162)

- 21) 「近代日本における朝鮮蔑視観の形成と朝鮮人の対応」(三宅明正・山田賢編『歴史の中の差別』日本経済評論社、2001年6月、pp. 67～106)
- 22) 「教科書問題と日本原理主義」(『専修大学人文科学研究所月報』200、2002年3月、pp. 35～47)
- 23) 「近代朝鮮の小国思想」(菅原憲一・安田浩編『国境を貫く歴史認識』青木書店、2002年9月、pp. 138～157)、のち韓国にて『녹색평론』(제146、2016년 1-2 월)に翻訳掲載される。
- 24) 「갑오농민전쟁의 이상과 현실」(동학농민혁명기념사업회편『동학농민혁명의 동아시아적 의미』서경문화사、서울、2002年5月、pp. 163～185)
- 25) 「植民地朝鮮における勤儉思想の展開と民衆」(宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識』Ⅱ、慶應義塾大学出版会、2005年3月、pp. 191～239)
- 26) 「15年戦争下の朝鮮民衆—植民地近代論批判試論」(『朝鮮奨学会論文集』第25集、2005年9月、pp. 9～29)
- 27) 「天道教の正統運動—異端と民衆の排除」(『歴史学研究』808、2005年11月、pp. 14～26)
- 28) 「解放前後期在日朝鮮人にとっての民族と生活」(宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識』Ⅲ、慶應義塾大学出版会、2006年7月、pp. 49～112)
- 29) 「日本/朝鮮におけるアジア主義の相克」(『情況』第3期第8巻第2号、2007年4月、pp. 62～80)
- 30) 「日本帝国の膨張と朝鮮知識人—東亜協同体論と内鮮一体論をめぐって」(石田憲編『膨張する帝国拡大する帝国—第二次大戦に向かう日英とアジア』東京大学出版会、2007年4月、pp. 163～201)
- 31) 「植民地朝鮮におけるキリスト教系終末運動の展開と民衆—燈台社事件を中心に」(『メトロポリタン史学』4、2008年12月、pp. 33～58)
- 32) 「朴殷植における国家と民衆—朝鮮的政治思想・政治文化の葛藤」(深谷克己編『東アジアの政治文化と近代』有志舎、2009年3月、pp. 186～217)

- 33) 「政治文化の変容と民衆運動—朝鮮民衆運動史研究の立場から」(『歴史学研究』 859、増刊号、2009年10月、pp. 2~12)
- 34) 「武断政治と朝鮮民衆」(『思想』 1029、2010年 1 月)
- 35) 「パン・ツンゲーシズムと東アジア」(『アジア研究』 第 5 号、静岡大学人文学部アジア研究センター、2010年 3 月、pp. 17~26、のち『朝鮮奨学会論文集』 28 〈2011年、pp. 37~46〉に再掲載)
- 36) 「危機に立つ大韓帝国」(『岩波講座 東アジア近現代通史 日露戦争と韓国併合』 第 2 巻、2010年10月、pp. 153~175)
- 37) 「朝鮮の士と民」(大橋幸泰・深谷克己編『〈江戸〉の人と身分 6 身分論をひろげる』 吉川弘文館、2011年 1 月、pp. 99~126)
- 38) 「朝鮮の近代化と宗教—東学=天道教の歴史から」(『宗教研究』367号、2011年 3 月、pp. 51~70)
- 39) 「近代の東アジアと「韓国併合」」(国立歴史民俗博物館編『2010年国際シンポジウム〈「韓国併合」100年を問う〉』岩波書店、2011年 3 月、pp. 20~31)
- 40) 「「韓国併合」の論理とその帰結—アジア主義と同化主義の行方」(『朝鮮史研究会論文集』 49、2011年10月、pp. 29~50)
- 41) 「崔時亨と全瑋準—士と民の相克」(『講座 東アジアの知識人』 1、有志舎、2013年 9 月、pp. 170~185)
- 42) 「明石順三—知識人の信仰と責任」(『講座 東アジアの知識人』 4、有志舎、2014年 3 月、pp. 344~361)
- 43) 「植民地朝鮮における仏法研究会の教理と活動」(武内房司編『戦争・災害と東アジアの民衆宗教』 有志舎、2014年 3 月、pp. 243~264)、のち韓国にて『원불교사상과 종교문화』 67 (2016年 3 月) に翻訳掲載される。
- 44) 「東学=天道教正史の変遷—教門の正統性と民族運動の主導権」(『歴史学研究』 938、2015年11月、pp. 16~26、60)
- 45) 「転換期における民衆の暴力—比較史的視点から見た伊勢暴動」(『人民の歴史学』 207、2016年 3 月、pp. 15~25)
- 46) 「植民者の朝鮮観」(杉並歴史を語り合う会・歴史科学協議会編『隣国

の肖像』(大月書店、2016年6月、pp. 84~102)

- 47) 「국가(도의관)를 둘러싼 근대 한일 사상 비교—이기와 나카에
조민」(미야지마 히로시・배항섭 編『동아시아에서 세계를 보면—
역사의 길목에 선 동아시아 지식인들』 너머북스、서울、2017年6
月、pp. 57~79)
- 48) 「『独立万歳』の政治文化と民衆」(『歴史評論』 827、2019年3月、pp.
32~43)
- 49) 「米騒動と植民地朝鮮」(井本三夫 編『米騒動・大戦後デモクラシー百
周年論集』 集広舎、2019年3月、pp. 37~98)
- 50) 「三・一運動における民衆のナショナリズム—二つの事例から」(『大
原社会問題研究所雑誌』 728、2019年6月、pp. 1~15)

05 批評・解説論文

- 1) 「自由民権・民衆運動史研究とアジア史の視点」(『自由民権』 9、1996
年2月、pp. 59~64)
- 2) 「박경식 선생님과 그 역사학」(『함께 보는 우리 역사』 55、역사
학연구소、2000年冬、pp. 13~19)、のち「朴慶植とその歴史学」と
題して日本語で『千葉史学』(39、2001年11月、pp. 66~74) に再掲載。
- 3) 「韓国の歴史教育と民衆史学」(『日本歴史学協会年報』 第16号、2001
年3月、pp. 33~39)
- 4) 「朝鮮の近代とその政治文化」(歴史学研究会 編『現代歴史学の成果と
課題 1980-2000年 II 国家像・社会像の変貌』 青木書店、2003年2
月、pp. 257~275)
- 5) 「韓国におけるフランス革命研究—朝鮮史の立場から」(『専修大学歴
史学研究センター年報』 2、2005年1月、pp. 38~56)
- 6) 「アジア史研究から見た丸山政治思想史学」(『未来』479、未来社、2006
年8月、pp. 15~20)
- 7) 「일본에 있어서의 갑오농민전쟁 연구 상황」(『동학학보』 13、
서울、2007年1月、pp. 7~22)
- 8) 「植民地近代性論批判序説」(『歴史学研究』 843、2008年8月、pp. 15~

- 27)
- 9) 「戦後日本の朝鮮史研究—近代史研究を中心に」(『歴史学研究』 868、2010年7月、pp. 1～12、64)、のち『「韓国併合」100年と日本の歴史学』(青木書店、2011年5月、pp. 165～198)に再掲載。
 - 10) 「解説」(『深谷克己著作集』第6巻、校倉書房、2010年6月、pp. 371～381)
 - 11) 「韓国強制併合과 現在」(『創作과 批評』 150、서울、2010年、pp. 475～497)
 - 12) 「グローバル・ヒストリー雑感—政治文化史と民衆運動史の視点から」(『歴史評論』 741、2012年1月、pp. 22～34、93)
 - 13) 「総論「社会」の発見と変容」(『講座 東アジアの知識人』 3、有志舎、2013年12月、pp. 1～12)
 - 14) 「総論 さまざまな戦後〈2 解放直後の朝鮮知識人〉〈5 東アジア知識人の現在〉」(『講座 東アジアの知識人』 5、有志舎、2014年4月、pp. 4～6、12～14)
 - 15) 「混迷する植民地公共性論の行方—植民地近代性論批判再論」(『アジア民衆史研究』 20、2015年5月、pp. 84～94)
 - 16) 「民衆運動史研究の方法—通俗道德論をめぐる」(アジア民衆史研究会・歴史問題研究所編『日韓民衆史研究の最前線—新しい民衆史を求めて』 有志舎、2015年12月、pp. 26～50)
 - 17) 「安丸史学の検証—逸脱と道德をめぐる」(『現代思想』 2016年9月臨時増刊号「総特集 安丸良夫—民衆思想とは何か」 pp. 276～291)

06 史論・評論・概説

- 1) 「三・一運動とその思想」(『基礎ハングル』 2-11、1987年3月、pp. 44～47)
- 2) 「李朝社会と現在」(『ウリ生活』 3、1988年11月、pp. 144～151)
- 3) 「東学農民運動と二人の黒幕」(『ウリ生活』 6、1990年5月、pp. 232～242)
- 4) 「挟撃される在日と〈開かれたナショナリズム〉」(『ほるもん文化』 1、

- 1990年9月、pp. 22～31)
- 5) 「甲午農民戦争における民衆」(『ウリ生活』7、1990年11月、pp. 168～179)
 - 6) 「甲午農民戦争100年」(『世界』596、1994年6月、pp. 113～120)
 - 7) 「民族運動の胎動」(朝鮮史研究会編『新版 朝鮮の歴史』三省堂、1995年2月、pp. 220～240)
 - 8) “Transition in Modern East Asian History and Japan”, *Central Europe and A Common Challenge* (Budapest, 1996, pp. 59～63)
 - 9) 「ユートピアなき世代の国家主義」(『世界』656、1998年12月、pp. 86～93)
 - 10) 「朝鮮ナショナリズムの系譜」(『大航海』30、1999年10月、pp. 64～73)
 - 11) 「日本のアジア主義—朝鮮・中国との比較」(高等学校教科書『日本史 A 現代からの歴史 指導資料』東京書籍、2003年、pp. 122～123)
 - 12) 「近現代日本の朝鮮認識と今日の岐路」(『近畿人権協会NEWS』第3号、2005年6月、pp. 5～8)
 - 13) 「グローバリゼーション下の歴史教科書—杉並の経験から」(『歴史評論』674、2006年6月、pp. 100～105)
 - 14) 「ウィーンに見る市民社会」(『帝国と民族アイデンティティ—東アジアとオーストリアをめぐって』人間文化研究機構連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究：交流と表象」国際シンポジウム報告書、2007年3月、pp. 18～20)
 - 15) 「갑오농민전쟁과 유토피아」(『내일을 여는 역사』29、서울、2007年秋、pp. 40～52)
 - 16) 「植民地下の朝鮮民衆」(『歴史地理教育』763、2010年8月、pp. 18～25)
 - 17) 「韓国併合」合理化論と現在の認識」(『オルタ』421号、2010年8月、pp. 4～8)
 - 18) 「世界戦争と改造—1910年代」(『岩波講座 東アジア近現代通史 世界戦争と改造』第3巻、2010年11月、pp. 1～40)
 - 19) 「アジアにおける民主化潮流と逆流」(『岩波講座 東アジア近現代通史

- 和解と協力の未来へ』第10巻、2011年8月、pp. 18～21)
- 20) 「당신이 몰랐던 3.1운동:민중의 꿈,분노,행동」(『오늘보다』제2호、서울、2015年3月、pp. 28～31)
- 21) 「文明化と国家意識—ヘイトスピーチの背後にあるもの」(『アリラン通信』54、2015年5月、pp. 4～7)
- 22) 「シベリア出兵と米騒動」(『歴史地理教育』876、2018年6月、pp. 4～9)

07 講演記録

- 1) 「朝鮮の民権運動」(『自由民権運動と現代—自由民権百年 第二回全国集会報告集』三省堂、1985年12月、pp. 340～345)
- 2) 「朝鮮にとっての日清戦争—甲午農民戦争100年を迎えて」(『月刊フォーラム』50、1994年9月、pp. 45～52)
- 3) 「日清戦争と朝鮮」(『なぜ朝鮮は植民地化されたか』『朝鮮問題』懇話会、1996年7月、pp. 17～25)
- 4) 「歴史教科書問題と私たち」(『セフルム』8、2002年2月、pp. 30～31)
- 5) 「皇民化をめぐる知の屈折—植民地化(乙巳保護条約)100周年にちなんで」(『セフルム』11、2005年2月、pp. 8～11)
- 6) 「海峡が隔てる差異—歴史社会的差異から見た日本と韓国・アジア」(『政経研究時報』9-1、2005年6月、pp. 1～3)
- 7) 「8・15解放前後の在日コリアンと現在—青少年・知識人・民衆をめぐって」(『中央大学学会コリア同窓会支部会報』第10号、2007年3月、pp. 6～16)
- 8) 「グローバリゼーション時代の思想と歴史研究・教育—朝鮮史と民衆史の立場から」(『東京の歴史教育』36、2007年7月、pp. 3～20)
- 9) 「三・一運動と日本」(『1919年3・1独立運動90周年記念の集い—その歴史的意義と今日的課題』日朝協会・日朝協会東京都連合会、2009年6月、pp. 7～17)
- 10) 「近代朝鮮の国家構想—韓国併合100年にちなんで」(『セフルム』№16、2010年2月、pp. 9～15)
- 11) 「朝鮮半島と日本の過去と現在—「韓国併合」100年が問うもの」(『月

- 刊 『憲法運動』 390、2010年 5 月、pp. 2～12)
- 12) 「占領下の在日朝鮮人とその生活」(国立歴史民俗博物館・原山浩介編『歴博フォーラム 占領下の民衆生活』東京堂出版、2010年 5 月、pp. 118～142)
 - 13) 「韓国併合への道—伊藤博文と安重根をめぐって」(『房総史学』 51、2011年、pp. 6～15)
 - 14) 「植民地朝鮮の近代と民衆」(『メーレック・ブックレット』 6、2016年 7 月、pp. 17～29)
 - 15) 「朝鮮半島の政治文化を考える—3・1 朝鮮独立運動100周年に寄せて」(『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ 千葉県AALA版』 122～125、2019年 4～7 月、pp. 3～6、pp. 3～5、pp. 4～10、pp. 4～7)

08 学会コメント・学会スピーチ

- 1) 「甲午農民戦争と朝鮮民衆のナショナリズム—鄭在貞氏の報告によせて」(比較史・比較歴史教育研究会編『黒船と日清戦争』未来社、1996年 3 月、pp. 140～144)
- 2) “Comment”, *Fussing Modernity : Appropriation of History and political Mobilization in south Asia, JCAS Symposium Serieis 11* (The Japan Center for Area Studies National museum of Ethnology, Osaka, 2000, pp. 213～214)
- 3) 「朝日近世社会比較試論—久留島浩報告に寄せて」(国立民族学博物館・国立歴史民俗博物館『「ユーラシアと日本：交流とイメージ」プレ・シンポジウム報告書』2005年12月、pp. 53～69)
- 4) 「近代移行期東アジアにおける君主と士の位相—深谷克己・安在邦夫報告に寄せて」(早稲田大学アジア歴史文化研究所『シンポジウム報告集 近代移行期の東アジア—政治文化の変容と形成』2005年12月、pp. 65～74)
- 5) 「国民国家形成における韓国と日本の分岐点—「国民国家の比較的研究」の意義」(『韓国における国民国家研究の現状と課題』人間文化研究機構連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究：交

- 流と表象」国際シンポジウム報告書、2006年3月、pp. 12～15)
- 6) 「『国民国家研究の視点から権力システムを考える』コメント」(人間文化機構連携研究『シンポジウムユーラシアと日本—交流と表象の現状と課題』2006年12月、pp. 32～38)
 - 7) 「植民地近代論批判の立場からのコメント」(『歴史学研究』833、増刊号、2007年10月、pp. 122～125)
 - 8) 「「1894年農民戦争に関連した衝突する歴史記憶に対する管見」討論」(『第7回韓日歴史会議反乱か？革命か？』日韓文化交流基金、2008年3月、pp. 51～54)
 - 9) 「趣意説明 シンポジウム「いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来」の開催にあたって」(『シンポジウム「ユーラシアと日本—いまなぜ国民国家か—国民国家の過去・現在・未来—」報告書』2009年3月、pp. 6～7)
 - 10) 「アジアにおける国民国家形成を比較することの意義」(『ベトナムにおける民族と国家』人間文化研究機構連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究：交流と表象」ハノイ・シンポジウム報告書、2009年3月、pp. 43～45)
 - 11) 「儒教的民本主義と近代日朝関係・比較史—拙著『近代朝鮮と日本』への論評を踏まえて」(『アジア民衆史研究』19、2014年5月、pp. 58～69)
 - 12) 「植民地朝鮮をいかに見るか—書評：拙著『植民地朝鮮と日本』への応答」(『アジア民衆史研究』20、2015年5月、pp. 73～83)
 - 13) 「植民地近代の見方—暴力と主体の問題をめぐって」(『民衆史研究』91、2016年7月、pp. 51～58)
 - 14) 「災害飢饉時における国家と名望家—報告を聞いて」(『歴史評論』806、2017年6月、pp. 90～96)
- 09 研究ノート・予稿論文 (のちに論文集として刊行収録されたものは含まない)
- 1) 「東学集団と甲午農民戦争の歴史的 성격」(『朝鮮史研究会会報』64、

- 1981年 9 月、pp. 5～7)
- 2) 「朝鮮ナショナリズムにおける儒教」(『学人』 1、江蘇省、1991年11月、pp. 522～524)
 - 3) 「東学創建の 歴史的意義와 民衆」(갑오농민혁명계승사업회・정읍시主 催 『국제학술대회 갑오농민혁명의 민중사적 재조명』 갑오농민혁명 106 주년기념 제33회 갑오농민혁명기념제、정읍、2000年 5 月、pp. 9～13)
 - 4) 「일본교과서에 있어서의 갑오농민전쟁의 서술」(갑오농민혁명계승사업회主催 『한민족제학술대회 남·북·중·일 역사교과서를 통해본 역사인식』 동학농민혁명 110주년기념 제 37회 동학농민혁명 기념제、정읍、2004年 5 月、pp. 7～11)
 - 5) 「갑오농민전쟁의 논리와 비교사적 위상—글로벌리제이션시대의 민중운동사연구와 관련하여」(동학농민혁명기념재단主催 『동학농민혁명 120주년 기념 국제학술대회—동학농민혁명 평화・화해・상생의 시대를 열다』 국립중앙박물관、서울、2014年10月、pp. 399～413)
 - 6) 「일본에서의 韓国近代史研究의 현상과 과제」(전북대학교・전주시主催 『2015 세계 한국학 전주 비엔날레 프레대회』 전주、2015年12月、pp. 90～96)
 - 7) 「갑오농민전쟁의 세계사적 위상 — 진도동학농민군 탄압과 관련하여」(전라남도主催 『진도동학농민혁명의 동아시아적 의미와 그 위상』 진도군 칠마도서관、2016年10月、pp. 43～55)

10 学界動向・書評

- 1) 「朴宗根『日清戦争と朝鮮』」(『歴史評論』 410、1984年 6 月、pp. 102～106)
- 2) 「姜徳相『朝鮮独立運動の群像』・金哲央『人物 近代朝鮮思想史』」(『朝鮮史研究会会報』 77、1984年10月、pp. 5～7)
- 3) 「1987年の歴史学界：回顧と展望—朝鮮 2」(『史学雑誌』 97-5、1988年 5 月、pp. 269～273)

- 4) 「立ちはだかる近代—丸山真男著『戦中と戦後の間』」(『歴史評論』505、1992年5月、pp. 12～13)
- 5) 「千葉県日本韓国・朝鮮関係史研究会編『千葉のなかの朝鮮』」(『千葉史学』41、2003年1月、pp. 71～73)
- 6) 「須田努『「悪党」の一九世紀—民衆運動の変質と“近代移行期”』」(『歴史評論』645、2004年1月、pp. 98～102、97)
- 7) 「2006年の歴史学界：回顧と展望—日本近代〈植民地〉」(『史学雑誌』116-5、2007年5月、pp. 179～182)
- 8) 「小倉紀蔵『朝鮮思想全史』」(共同通信2017年12月14日配信、『南日本新聞』2017年12月17日、『京都新聞』2017年12月24日、『神奈川新聞』2018年1月7日など)

11 小論・コラム

- 1) 「儒教と女性—金允植の改嫁論」(『朝鮮女性史読書会通信』11、1987年4月、pp. 4～5)
- 2) 「自強と富強—朝鮮の場合」(『千葉史学』18、1991年5月、pp. 11～13)
- 3) 「乙巳保護条約の風景」(『朝鮮画報』375、1992年11月、pp. 42～43)
- 4) 「義賊と義民」(『歴史地理教育』601、1999年11月、pp. 60～61)
- 5) 「唯我独尊の暗い教科書」(小森陽一・坂本義勝・安丸良夫編『歴史教科書 何が問題か—徹底検証Q & A』岩波書店、2001年6月、pp. 202～203)
- 6) 「日本と朝鮮のアジア主義」(高等学校教科書『日本史A 現代からの歴史』東京書籍、2003年2月、p. 103)
- 7) 「申采浩」(『岩波講座 東アジア近現代通史 世界戦争と改造』第3巻、2010年11月、pp. 384～385)
- 8) 「全琫準」(『岩波講座 東アジア近現代通史 東アジア世界の近代』第1巻、2010年12月、pp. 130～131)
- 9) 「朝鮮における第三の道」(『岩波講座 東アジア近現代通史 アジア太平洋戦争と「大東亜共栄圏」』第6巻、2011年1月、pp. 122～123)
- 10) 「歴史の両側 朝鮮半島と日本」(横浜教科書研究会編『自由社版『新

- 編『新しい歴史教科書』をどう教えるか？—近現代編』3、2011年7月、pp. 52～53)
- 11) 「アジアから見た近代日本」(高等学校教科書『日本史A 現代からの歴史』東京書籍、2012年3月、p. 121)
 - 12) 「甲午農民戦争と韓国の民主主義」(『季刊はぬるはうす』48、2015年11月、pp. 28～29)
 - 13) 「最後の葉書—安丸史学との対話」(『思想』1106、2016年6月、pp. 139～142)
 - 14) 「比較思想史研究からみえてくるもの—拙著『朝鮮の近代思想』刊行に寄せて」(『CROSS ROAD』創刊号、2019年6月、pp. 1～2)

12 新聞論説

- 1) 「戦前回帰の思考を恐れる」(『社会新報』1980年10月7日)
- 2) 「行き交う民、流れ加速」(『朝日新聞』2003年9月14日朝刊)
- 3) 「新しい歴史が始まった」(『朝日新聞』2004年3月3日朝刊)
- 4) 「心がけひとつで近くも遠くもなる朝鮮海峡」(『船員しんぶん』2004年8月25日)
- 5) 「朝鮮史から見た日本の国体思想」(『しんぶん赤旗』2010年3月10日)
- 6) 「「併合」百年—日韓の近代化論に危うさ」(『朝日新聞』2010年3月25日朝刊)
- 7) 「朝鮮三・一運動から95年」(『しんぶん赤旗』2014年2月28日)

13 インタビュー

- 1) 「消えるチマ・チョゴリと日本—際住の思想」(『東京新聞』1999年3月18日夕刊)
- 2) 「韓国併合100年に歴史検証を」(『社会新報』2010年2月3日)
- 3) 「「見解の相違」では未来開けぬ」(『朝日新聞』2014年10月24日朝刊)
- 4) 「日本の植民地支配下にあった朝鮮—三・一独立運動100年」(『しんぶん赤旗』2019年2月5日)

14 座談会

- 1) 「[在日を生きる (林哲・姜尚中・文京洙・趙景達)]」(『歴史批判』 3～5、1986年8月、1987年3月、1987年8月、pp. 227～255、pp. 199～232、pp. 243～277)
- 2) 「[民族教育の行方] (金敬得・辛淑玉・金榮・趙景達)『ほるもん文化』 5、1994年、pp. 11～39)
- 3) 「[東アジア再考のとき—歴史の構造変動の中で (小倉和夫・趙景達・和田春樹)]」(『図書』 岩波書店、2010年11月、pp. 2～14)
- 4) 「[共同討議 和解と協力の未来へ 1990年以降 (和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真)]」(『岩波講座 東アジア近現代通史 和解と協力の未来へ』第10巻、2011年8月、pp. 7～53)
- 5) 「[座談会 近現代東アジアのなかの知識人 (趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄)]」(『講座 東アジアの知識人』 5、有志舎、2014年4月、pp. 369～423)
- 6) 「[対談 日朝相互認識の今昔 (大門正克・趙景達)]」(杉並歴史を語り合う会・歴史科学協議会編『隣国の肖像—日朝相互認識の歴史』 大月書店、2016年6月、pp. 283～306)

15 翻訳

- 1) 韓勝憲「東学農民革命とアジアの新しい歴史」(『世界』 693、2001年10月、pp. 248～256)
- 2) 朴賛勝「1910年代における渡日留学生の思想的動向」(宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識』 II、慶應義塾大学出版会、2005年3月、pp. 147～189)
- 3) 李京遠「東学の布教と儒教倫理の活用」(『日韓民衆史研究の最前線』 有志舎、2015年12月、pp. 86～105)

16 辞典・事典

- 1) 『世界民族問題事典』(平凡社、1995年9月、3項目担当)
- 2) 『新版 日本史辞典』(角川書店、1996年11月、36項目担当)

趙景達先生を送る

- 3) 『歴史学事典』 4・5・6・7 (弘文堂、1996年12月、1997年10月、1998年12月、1999年12月、8項目担当)
- 4) 『日本史広辞典』 (山川出版社、1997年10月、26項目担当)
- 5) 『世界史辞典』 (角川書店、2001年10月、23項目担当)
- 6) 『日本史文献事典』 (弘文堂、2003年11月、3項目担当)
- 7) 『国際政治事典』 (弘文堂、2005年11月、1項目担当)
- 8) 『世界人名大辞典』 (岩波書店、2013年12月、16項目担当)

※その他エッセーや各種小文があるが、これらは省略した。